〔活動報告〕

カルガリー大学（カナダ）看護学部家族看護ユニット：エクスターンシップ　参加報告

北里大学看護学部
森　　秀子

新学期の講義も軌道に乗った春たけなわの去る4月25日，ゴールデンウィークをカナダで過ごすことにしたわれわれ研修団一行は期待を胸に成田を出発した．カルガリー大学看護学部・家族看護ユニットでは，毎年エクスターンシップの募集をしており，カナダをはじめ欧米，アジア諸国から参加者があり，日本からも個人としての参加がなされてきた．今回はカルガリー大学看護学部の協力を得て，特に日本の指導者や実践者に対し，通訳付きのコースが設けられた．

昨年11月に本学会理事長，杉下教授（東京大学）が座長となり，「家族看護モデルワークショップ」が開催されたが，大阪会場で聴講した私は，ライト博士とドゥアメル博士によるカルガリーモデルに大いに関心を抱き，この機会に是非現地の状況を直に視察し，理解したいと考えての参加だった．

家族看護とは，古くから臨床の場では重要視されていながら，なぜか中心的な課題として設定されてこなかった領域ではあるが，本学会の設立にも示されているように，今まさに，真正面からの取り組みがなされ始めている．そんな折りに，10年余りの臨床実践と研究をふまえたカルガリーモデルの提示はたいそう魅力的であった．

家族看護をどのように実践しているのか．学としてどう成立させるのか，また，どう教えていくのか，どう研究に取り組んでいるのか．わが国にはわが国なりの過程があるとはいうものの，整理されたモデルがあるなら一見に値する．

カルガリー大学は，アルバータ州の広大な牧地・耕地に囲まれたのどかな街にあった．宿舎から徒歩で20分の道のりを重い資料を背負って毎日往復したことは，かなりの難行であったが，終わってみれば久しぶりにいい運動になった．カルガリーはまだ早春で，陽射しは暖かいとはいえ天候がめまぐるしく変わり，夕方には小雪が地面を白く覆うこともあった．テレビの天気予報でどの地区にもすべてのお天気マークが並ぶのがおもしろかった．

大学へ向かって歩く

今回の日本のエクスターンシップ参加者は，大学の教職者が2/3と多く，病院等臨地の場における家族看護の実践者，特にカルガリーモデルの先駆者たちを含む28名であった．　出発時の結団式(？)や，5日間の研修期間を通し，それぞれの方々が語ることばの端はしに，真摯な学びへの抱負がにじみでているのが感じとれた．日本からの研修生は非常に熱心である，と，他国の研修生が感心していた．日本の他にはカナダから14名とアメリカから4名の参加者があり，合同のクラスで学ぶことができた．学会の国際ジャーナルなどによく投稿されている研究者と机を並べ，海を越えての身近さを感じられたのもひとつの収穫であった．彼らは実に活発で講義の進行中でも自由に質問やコメントのやりとりをはさみ，双方向の生き生きとしたクラスが展開されたが，

熱心に聴講する

静かに傾聴する我らとの習慣の違いを改めて意識する事となった．こうした授業の展開は教授方法の実際のひとつのモデルとしても参考になった．

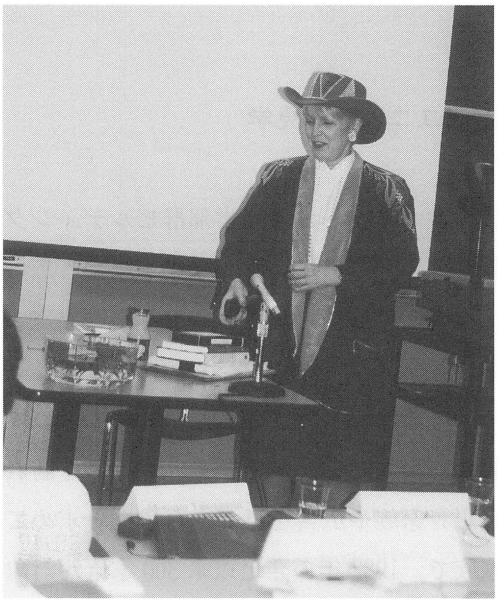
講義は，OHPに沿って進められ（対訳付き），説明は同時通訳されたので，たいへん分かりやすかった．生で聴ける語学力がある人はもっと楽しむことができたことと思う．

なぜなら，ライト先生とベル先生が，軽妙な会話をふんだんに交わしながら講義が進行したからである．必要なところでは講義内容と一致するVTR場面が紹介された．臨床見学はできなかったが，それを超えて臨場感・迫力があり，講義と相まって認識を深めることができた．

また，要望に応じて関連のある理論やデータを示す参考文献のリストがコピーされ毎日のように配布された．この作業は参加者の一人でもある大学院生が請け負ってくれた．

講義のレベルは，教育者と実践家のための上級クラスの内容が主だったが，復習の形で中級の内容が加味され，初級の内容については自由選択の形で組みこまれていた．

講義の合間，休み時間には隣室にリフレッシュメントが豊富に用意され，なごやかな会話が交わされたことも，中身の濃い授業になじめた一因であろう．このことを含めて，主催者およびコーディネイターの方々がきめの細かいサービスにこころをくだいて下さったことによるところが大きいことを感謝の念をこめてつけ加えたい．さらに日本の参加者のために，現地の通訳者，随行員が熱心に働いて下さったことも研修の内容がいっそう豊かなものになった所以である．5日間の研修は，時差調整のためのバンクーバー・ブッチャートガーデンの1日，中間のバンフへのツアー，そしてベル博士邸でのデザートパーティなどの楽しいオプションを含め，全員が元気に過ごすことによって，実り多い結果を得ることができた．



カウボーイスタイルで最終日の授業
（上：ライト先生・下：ベル先生）

以下，特に印象深かった事項に簡単にふれてみた

い．

家族看護ユニットの見学

家族看護ユニットは専門学部群ビルディングの中に位置する1フロアにある．家族が集える広い面接室と，複数のスタッフが入れる広めの観察室（通し鏡付き）の組み合わせになっている．面接室にはVTRセットが備えられており，必要に応じて専門の技師が録画することができる．　ここを訪れるのは紹介患者家族や広告を見て自ら援助を求めてくる患者家族で，1982年の発足以来300家族が対象になったとのことであった．学部生の見学実習，大学院生の研究教育，卒業生の実践研修も行われている．

貴重な実践，数々の報告や研究，教育に関する実績を積むために，このユニットの存在が大きく役に立っている．

Beliefについて

エクスターンシップのスケジュールの項目が示すように，　今回の研修のメインテーマはBelief(信念，ものの考え方)であった，といっても過言ではない．昨年出版された，ライト，ワトソン，ベルの3博士による著書「Beliefs: The heart of healing in families and illness」はここ15年間の実践と研究の集大成であるといわれているが，カルガリー家族看護モデルの中核にある概念が，この「信念ーものの考え方」である．信念とは人が経験を通して得た信条で，その人の肉体的，精神的機能に大きく影響するものである，と定義されている．信念には患者の信念，家族の信念，治療者の信念，および，彼らの属する文化・社会の信念が相互に関係しあって作用している．これらをふまえて，あらゆる健康問題において悪循環の中にありがちなネガティブな信念に，当事者が気付いてポジティブな方向転換ができるように介入することが家族看護の目標となる．この概念は

家族看護エクスターンシップスケジュールカルガリー大学看護学部

4月28日（月）	29日（火）	30日（水）	5月1日（木）	2日（金）
9：30 レジストレーション 9：00 歓迎の辞 オリエンテーション 10：30—11：30 家族看護ユニットとは何か 11：30—12：00 家族看護ユニット見学	9：00—12：00 家族についての信念 病気と苦しみについての信念	9：00—1：00 カルガリー家族アセスメントモデル カルガリー家族介入モデル	9：00—12：00 不都合な信念を問い直し，変容させる	9：00—12：00 家族保健研究について
昼食　12：00—1：00			昼食　12：00—1：00	
1：00—1：30 家族看護ユニット見学 1：30—4：30 専門看護モデル なぜ信念が大切か 信念を変化させる土台を作る 治療的会話	1：00—4：30 変化についての信念 実践家に関する信念	午後 自由時間 7：00—9：00 病気に関する信念を見分ける	1：00—4：30 変化を見分ける—ポジティブな信念の発見と強化·固定 7：30 デザートパーティ	1：00—3：00 実践—教育—管理に関する新しい試みを実践することについて プログラム評価

われわれにとってもなじみやすいものであり，この研修をきっかけとして，これからの実践に応用してみたいと考える．

Reflecting team について

家族看護ユニットにおいて治療的介入を行う際に，観察室にこの考察チームが介入の過程を見守りながら客観的な助言を与えるというシステムを学んだ．治療者が常に冷静によき援助者で居られるためや，初心者のトレーニングにも活用できることは，非常に実用的なアイディアであると思った．チームの存在を患者にもオープンにし，面接室と観察室は卓上の電話でつながれていて，意見交換をできることも，その場への参加者が対等な立場にあることを示している．一方向的な指導から共にかかわり合うこれからの介入方法のあり方を示唆するキイとして，新鮮さを感じた．

VTR の記録－具体的な手法

家族看護のスタッフたちが，長年の実践と研究を重ねた結果，何度となく検討し，修正を重ねてきたものが，家族看護アセスメントおよび介入のモデルとして，完成された．その中でとりわけ効果的であったと考えられるものが，現在用いている具体的な手法である．それらが講義の中で整理されて提示され，また，それを表す場面記録が VTR によって視聴できたことは，感動的であった．その詳細は省くが，どのひとつをとっても，磨きをかけられた納得の行く手法なのだ，と感心させられた．ものごとを構造的にとらえて，その複雑なシステムの相互作用の中で，肯定的な解決策を探っていこうとするものの考え方に，社会の中で生活する生きた人間を対象とする看護のあり方が的確に示されていると考える．

豊富な参考文献集

家族看護ユニットの研究と教育に直接関係のある文献集をはじめ，エクスターンシップのための文献集，家族看護教育のための文献集，そして特に今年の国際家族看護学会で重要な位置にある Humberto Maturana の著述，等々，たくさんの参考文献が紹介された．短い研修期間では伝えきれない内容を，その都度，参考文献集で補うという講義方法がとられたことは，喜ぶべき事ではある．上級コース，大学院レベルにおいては当然のことではあるが，帰国後，その中の特に興味あるいくつかに当たってみるだけでも相当な宿題を抱えたことになり，ずっしりと重いおみやげとなった．